

子どものよりよい成長のための 支援のあり方を探る

松尾忠正（ちば子ども学会 会長）

はじめに

昨今、青年前期にあるこどもの自死、肉親への殺傷行為が連日マスコミに大きく報じられている。目を覆い、耳塞ぎたくなる思いとともに、大人である私たちが、彼らを何とかして助けてやれないものか、彼らに続く若者が再び世に現れぬために何か手立てはないものか、そう思うのはごく自然なことだろう。

折も折、拙文掲載の機会をいただくことになった。そこで都市部の義務教育界に40年近く身をおき、かつ、今も子どもらと密に関わり続ける実践者の立場から、眼前に躍動する子どもたちの直観を拠り所としながら、未来を担う子どもたちのよりよい成長のためにすべき大人たちの支援のあり方について考察を試みたく筆を起こした次第である。

子どもをとりまく環境の変化

子どもに関して何か事が起きるたびに、巷では環境の悪化とそれに伴う子どもの力の低下が原因として取りざたされる。「家庭教育力の低下」「コミュニティーの崩壊」「コミュニケーション力低下」「自然体験不足」等々、枚挙に暇がない。

果たして“悪化”はどの程度あり、本当に子どもの問題の原因になっているのだろうか。この問いをただすため、都市部で子どもを取り巻く環境が変わった様子を、基準を1970年代において見てみたい。今の子どもたちの親が同じ年齢で生活してきた時代である。

○個人的生活

この時代初期の少年が統計的に顕著な特徴を示すのは犯罪率の少なさで、少なくとも60年代に比し、激減している。子ども流に言えば「悪い子」をあまり見かけなくなったとっていい。少年漫画ブームは峠を越し、代わりにテレビの見過ぎが親の眉をひそめさせる問題になっている。一方、少女漫画がブームを迎え、ゲーム玩具・アニメキャラクターなどがおもちゃ屋に山と積み、物があふれる時代を象徴した。ただし、当時の子どもたちには携帯もなければインターネットもない。情報交換はやはり直接会ってするのが一般的だった。78年には青少年の自殺が多発し、少年（特に少女）非行が急増していると警視庁は指摘している。この頃

になって「竹の子族」が原宿界隈に姿を見せ始めている。

○家庭環境

70年代は団地での生活が定着した時代といっている。標準は3DK、子ども部屋が確保される一方、両親は共稼ぎで家にいず、「カギっ子」はありふれた風景になった。個人的な経験だが、当時、教え子に家での学習習慣をアドバイスした折「親はいなくてもいいけれど、テレビのない生活なんか考えられない」と真顔で訴えてきた女兒が今も強く頭に残っている。当時の調査では「しつけに自信を持っている」母親がかなり多く、家族旅行もブームになった。シングルペアレントは市民権を得ておらず、家族関係は辛くも保たれていたようだ。後期になって「赤ちゃんに触れない母親」の急増が問題になってきた。

○近隣・学校環境

子どもは巷にあふれており、子ども会活動は健在だが、参加者の減少が目立ち始めた。夏休みの朝のラジオ体操には結構子どもたちが集まってくる。が、それも小学生までで、中学生は見向きもしない。公園も街路も大変お粗末で、現代のほうがはるかに整備されている。誰もが高校進学を目指し、金の卵と呼ばれた中卒就職者が激減している。学力面では「偏差値」が幅を利かせ、「受験戦争」という言葉が頻繁に使われるようになった。雑巾を絞れぬ子が社会問題化し、学校検診に肥満検査が加えられるようになった。シンナー吸引が再燃し、非行の低年齢化が問題になったのもこの時代である。学校では「力による生徒指導」が幅を利かせており、学校生活の決まりは細かく規定されていた。面従腹背が子どもたちの生きる知恵でもあった。

○地域社会環境

60年代における街の熱気と空気の汚れ、雑然とした街並みが問題にされだしたのが70年代である。「モーレツからビューティフルへ」という言葉がブラウン管に登場した。学校では「繁華街へは親同伴で」と口を酸っぱくして注意し、夏休みに一人旅行の子どもが増えたと眉をひそめた。もちろん防犯ブザーなど持っている子はいない。ボランティア活動は言葉自体が流布

しておらず、公民館活動も活発とは言えなかったし、子ども向けの体験活動施設もほとんどなかった。学校を出たら勉強は終わり、あとは汗水たらして働いて一戸建ての家を構えるのが、大人が描く一般的なライフプランだった。もちろん子どもたちもそれを目指していた。

記述してみてつくづく思うのは、30年前も今も、子どもに関わる問題にそれほど大きな違いがないことである。少年非行も自殺も子どもの家庭置き去りも、ジャンクフードも読書離れも、ちゃんと(?) 社会問題になっている。「気に食わなければオフ、リセット」という意識も同様である。顕著な環境の変化といえば、子どもの数の激減、漫画やテレビがメールやネットに取って代われ、個性的服飾・シングルペアレントなど個人主義的ライフスタイルが一般的になり、学校が力づくで子どもを抑え込んだり導いたりしなくなり、子どもを守り育てる環境整備が進んだことだろうか。とりわけ大人の視線が子どもに向く度合いが増し、しかも柔らかく(場合によっては神経質に)なったことがこの30年の間の大きな変化だと私には思える。

もう一つ大きく変わったと思うことがある。それはコミュニケーション力を育成する教育課題についての大人の姿勢だ。社会的動物である人間にとってこの力の育成は子どもの成長支援に欠かせないが、30年前には社会も学校もこれがそれほど重視されていなかった。親も地域社会も個々の幸福追求を優先させ、周囲にあまり目が向かなかつたし、学校教育も個性を重視し、そして個々の差別化を煽り立てている。バブルが崩壊した90年代になり、コミュニケーション力の育成は教育の大きな課題として取り上げられるようになった。メール・ネットの出現といった情報環境の変化が大いに関係していると思える。

支援のあり方を探るヒント

子どものコミュニケーション力向上を支援するには、経験的に見て少なくとも乗り越えるべき二つの課題があると思われる。一つは今の子どもたちの親である。先に述べたとおり、今の子どもたちの親はかくの如き子ども時代を送っている。としたら、今急に「家庭の教育力」を云々されてもピンと来ない親が多いはずである。なぜなら、彼らの多くが家庭の教育力をそれほど受けずに育っている。その上、彼らには権威、とりわけ学校に対する感情的反発がある。有無を言わ

さず規則を守らされ、偏差値で追いまわられ、今になって「学校ができないから家庭が頑張れ」とは何事かという親たちの感情を汲むことが課題解決には不可欠だろう。

もう一つは子どもたちのコミュニケーション状況を、より実態に即して把握することである。先述の比較を例にいうと、幼児から小学校低学年にかけての子どもは、漫画漬け、テレビ漬けは30年前とそう変わってはいない。親の生活に合わせて夜遅くまで起きている生活に慣れたこと、子育て不安を訴える親が増えたことなどが、子どもの心身の成長に影響し、コミュニケーション力不足を助長させている可能性がある。

30年前との違いが顕著なのは小学校中高学年からである。兄弟も少なく、親も普段は家にいないのは同じだが、今の子どもたちはメール・ネットなど強力な情報交流手段を身につけ、自分たちだけの世界を創ることに成功している点が大きく違う。ここにはいいことも多いが、恐ろしいことも多い。コミュニケーション力向上には自分の思うに任せぬ他者の存在が不可欠だが、メールやネットの場合、他者は時として不特定者となり、瞬時にしかも集団となって彼を襲ってくる。対抗する彼には援護者がいないから他者との調整などをしていく余裕はなくなってしまう。これがどれほど恐怖を伴うものかを大人たちは知っていなければならない。

ささやかな取り組み・収穫

子どもや親の実態をリアルに把握するにはどうしたらいいか。「子どものことは子どもに」齊藤哲瑯氏(川村学園女子大学教授)のアドバイスで、私たち「ちば子ども学会」は、先の総会の折、千葉市内在住の小中学生に依頼してシンポジウムを催すことにした。標題は『子どもから大人に物申す』。自分から手を上げてくれた子どもたち数人が壇上に並び、齊藤哲瑯氏の司会で、日頃の思いのたけを語ってもらった。以下はその概要である。

【家庭生活】

多くは父親との微妙なずれを感じている。自分の意図がなかなか通じぬもどかしさと同時に、父親の言行不一致には不信を募らせている。子どもをもう少し理解してほしいとの声もあった。ただし、趣味が同じで休日ごとに父親と行動を共にする男児は父親を大いに尊敬している。母親は自分をよくわかってくれる存在



として映っている。しかし、感情的になることや年齢のごまかしには批判的である。両親ともに子どもの理解者であり、しっかり見守るよき大人であることを欲している。

〔学校生活〕

小学生は即座に「学校は楽しい」と言うが、中学生は一様に口を濁す。最大の理由は「勉強が難しくなった」こと。学校はどこもいじめを目にすることはほとんどなく、苦手な仲間はあるが、大半は親身になって付き合ってくれる人ばかりだと言う。断定的に考えを押し付ける、挨拶を返してくれないなど、権威的に振る舞う教師が嫌われる対象。一人ひとりを思いやり、えこひいきや裏表がなく、理由付けをきちんと述べて忠告してくれる教師には好意を寄せる。上下関係のことさらに見せ、子どもたちの中に入ろうとしない校長には厳しい目が。気さくに話しかけ、遊びに参加してくれる校長はすこぶる評判がいい。小学校の教師と中学校の教師とでは、子どもとの距離感が異なるようである。

〔社会生活〕

くわえタバコ・自転車の無謀運転・公園のルール無視・飲酒運転など、モラルの低い大人への不信感が強い。「自分の責任で行動する意識が低い」「本物の大人が少ない」との批判に続き「(大人に対して)定期的に道徳のテスト」の要求までも。毎度のようにテレビカメラの前で謝罪する姿に情けなさを感じ、一様に“大人になりたくない”を口にする。ストレートに考えを述べる爆笑問題の太田光やニュースステーションの古館伊知郎は好かれるが、他人の欠点を笑うビートたけしや押し付けがましい細木数子を嫌う。大人は欲望を理性で抑え、言行を一致させ、子どもの安全を守る存在であってほしいと求めている。

〔教育再生会議の提言について〕

「テレビを消して食事を」という提言については議

論が分かれた。食事時のテレビ番組はバラエティーやニュースが大半で、食事を忘れて見入ることは少ないと言う。食事をしながらいくつかの話題を探することで、家族の会話が弾むとのこと。ただし、父親がよく話してくれる家族の場合は、こうした配慮も必要ないようだ。

子どもたちの発言に耳を傾けながら、まず感じたのは、どの児童生徒も自分の考えを積極的に堂々と述べていることへの驚きである。趣味や未来像についても多様で、個を大事にする文化的風土がしっかり根付いていることも印象的だった。5人のうち3人が理科好きなのも驚いた。こじんまりした会とはいえ、学会に乗りこんでくるくらいだから、自分に自信を持っている子どもたちには違いない。それにしてもこの明るさはなんだろうと思う。案外、子どもたちは大人たちの心配をよそに健全な営みをしているのかもしれないなどと考えてしまうほどだった。

小さな行事だったが、このシンポジウムを通して得た収穫は私たちにとって大きい。先の感想との重複を避けて収穫を二つあげておく。一つは子どもたちが大人たちとのより密でフラットな交わりを強く望んでいるのがわかったこと。フラットな関係という点では、現代的な組織が追求している方向と奇しくも一致しており、興味がそそられるところだ。そしてもう一つは子どもたちがこのような発信の機会をより多く望んでいることがわかったこと。これは「様々な人と交わる機会」を増やす方法の一つとしての価値が高い。

おわりに

まさにささやかな体験である。お恥ずかしい限りだが、こうしたことを地道に繰り返しながら知恵を重ね、子どもたちのよりよい成長の支援に力を尽くしていきたいと考えている。諸氏の本論へのご批評をも含め、今後ともご支援をよろしくお願いしつつ筆をおかせていただく。